研究雑話(53)
人間発達の物質的基礎(十七):コトバと叙述(三―二)、等時性拍音形式(二語文への移行)

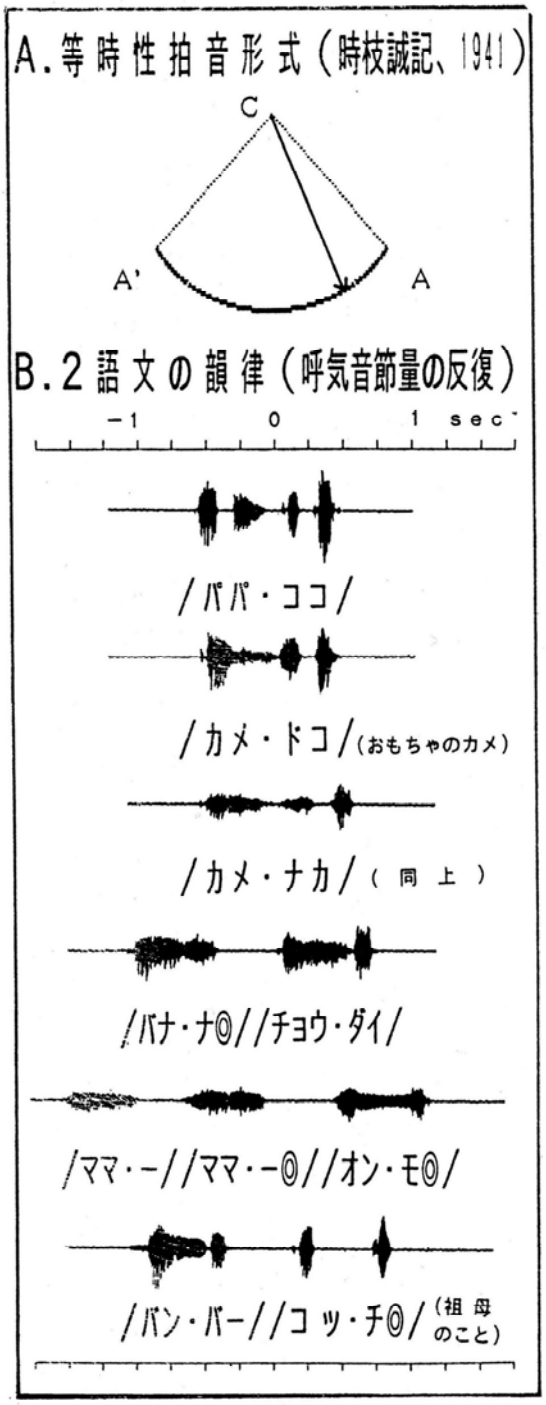
藤井力夫

前回は、音声波形という見えないものを媒介として聞いたり話したり、人間だけがもつ「楽器」としての機能の形成についてお話しました。《基底膜》や《声門》といった器官が入り口です。どのようにして可能となるのか、不思議なことです。頸定から寝返り、膝這い、歩行。この過程が対応。/アーウー/などの反復練習を基礎に大人の音声を模倣。それが移動の進歩にともなって食べたいものなど届かないものに対して/ウマウマ/等、発声による定位。呼気調節の自由を媒介とした、音響学的な側面と生理学的な側面との対立と同一の過程。これを仮定できると考えています。

今回は、発声をどのように繋げてお話しできるようになるのか、一歳児後半から二歳児前半にかけての「二語文」への移行をめぐってお話したい。/ブーブー/や/マンマー/の発語のなかにどのような必然性が内包されているのか、「等時性拍音形式」の存在をめぐってお話したい。

「等時性拍音形式」とは、国語学者の時枝誠記(一九四一)が日本語のリズムの生成原理として使った用語。図Aがそれで、ことばとしての「知覚」と「発語」を振り子の往復運動になぞらえ図式化しました。五、七、五だとか、高低、強弱などの要素はこれを基礎に形成されるとします。これは我々にとっても、とても大事な発想です。発語運動それ自体に、二語文から叙述へと移行する必然性が内在されていることになるのです。振り子運動なので、AからA'を「往拍」、その帰りを「復拍」と名づけて説明しましょう。

図Bは、かって国立国語教育研究所にいた大久保愛さんのお孫さんのことば、二歳〇ヶ月になった時の数日間の採取です。これを私の声で再生してみました。「等時性拍音形式」を理解するのに好都合です。例、/パパ・ココ/。/パパ/(往拍)と言えば復拍が残ります。それゆえ、願っている/ココ/と続けるのが自然。/パパ/、/ママ/、/カメ/など往拍にあたる発語がスムーズになればなるほど、復拍で言いたいことを表現できるようになります。この子の場合、ほぼ同じ時期に/ドコ/(何処)だとか/ナカ/(中)とか、空間的な関係(パラディグマ)についてどんどん叙述できるようになっています。

この時期、/チョウ・ダイ/も話せるようになっています。これはけっこう難しい。/ダ/と/イ/は/DAI/と母音が続き切り離せない。/ダイ/で一つのまとまり(音韻)を形成。それで、/ダイ/は復拍、/チョウ/は往拍と、往復の呼気運動で一つのことばを表現。/パパ・ココ/と往復できる力が、/チョウ・ダイ/と発音させたわけです。こうなると/バナ・ナ/とか、/コッ・チー/、/オン・モー/(外に出たい)、/バン・バー/(おばあちゃんのこと)など、往復の呼気運動でことばを表現。ここには、日本語の特徴である「つまる音」・促音/ッ/とか、「はねる音」・撥音/ン/を包含。それゆえ、のばすことも可能(長音)。往復の呼気運動で一語を表現できるということは、二往復以上の呼気運動でものの関係や自分の意図を叙述できるようなることを意味します。

(北海道教育大学教授)